書評

ウィリアム・H・ショー

『マルクスの歴史理論』

William H. Shaw, *Marx's Theory of History*, Stanford University Press, Stanford, 1978, ix+202 pp.

I

本書においては，マルクス研究がようやく学界に定着しはじめた最近のアメリカ合衆国における，唯物史観をめぐる問題意識と研究水準が，端的に示されている。

本書の著者ショーは，マルクス(とエンゲルス)の原典の叙述に忠実につき，安易なマルクス礼讃に陥らぬ堅実な姿勢を貫いて，マルクスの歴史理論(唯物史観，史的唯物論と同義とされる)を再構成する。本書の眼目は『経済学批判』「序言」の定式にのっとって，生産諸力と生産諸関係の概念の分析を通じて，社会の経済的動態，社会体制の歴史的移行に関するマルクスの理論を解明することにある。かかる内容の研究書は，国内外を問わず少なくはないが，その中でも本書の特徴は，なによりもまず生産諸関係概念の理解の仕方，および「序言」の定式の取扱い方に存する。この2点に力点をおいて，本書の内容を紹介してみたい(本書の構成は，第1章「生産の解剖学」，第2章「マルクスの技術決定論」，第3章「資本主義から社会主義へ」，第4章「資本主義への長い歩み」，第5章「結論」である)。

ショーによれば，マルクス歴史理論の基礎概念としての生産諸力と生産諸関係は，以下のように理解される(第1章)。

生産諸力(productive forces)とは，直接的生産過程で現実に使用され，結合される要素，つまり労働力と生産手段である。しかも，それはなによりも「労働の生産諸力」であって，「人間に内在する精神的，肉体的諸能力の総計」(『資本論』)としての労働力が，生産の最も重要な要素である。この労働力の持つ諸能力が伝達されることによって，生産諸力が蓄積，継承され，歴史の一貫性が形成される。これに対し，生産手段(労働手段と労働対象)が生産力として把握されるのは，労働の生産能力の物質的対象化であるが故である。さらに，生産諸力は科学と協業によって発展する。この内，科学は生産力を構成する。なぜなら，労働力が意識的因子を属性とするからである。他方，生産組織としての協業は，それ自身生産力ではない。また生産力概念は，労働の一定の投下量によって産出される財の量を意味する生産性(productivity)概念とは区別されねばならない。

生産諸力が結びつけられ，生産が実際に遂行されるのは，生産諸関係の内部においてである。この生産諸関係の全体は，経済的社会構成——生産諸力はこれに含まれないが，これを規定する——を形成する。そして生産諸関係には，マルクスは明示していないが，生産の「労働」諸関係("work" relations of production)および生産の「所有」諸関係("ownership" relations of production)が含まれる。

労働諸関係は，歴史的社会的形態を捨象した，労働過程そのものを制御する物質的技術的諸関係であり，そのあり方は生産諸力の性質に照応する。とはいえ，社会化された労働関係の形成が資本制的所有関係によって促されるように，一定のあり方での労働関係が出現するかどうかは，かなりの程度，所有関係の性格に依存する。所有諸関係は，一定の労働関係が存在する社会的歴史的枠組を形成する諸関係なのである。かかる所有関係は，生産諸力の人間相互間での帰属を決定するのみならず，生産物の社会的分配を構造化し，生産様式の一般的運動を統制するものでもある。これら2つの生産諸関係が区別されねば，資本制社会の分析は神秘的なものとならざるをえない。なおマルクスは，生産様式の概念を，生産の技術的な性質，仕方を示す場合と生産の全社会的なシステム——所有関係に規定される——を示す場合との2通りに用いるが，後者がより一般的な用法といえる。

基礎概念に関する以上の考察をふまえてショーは，マルクス歴史理論を「技術決定論」として特徴づける(第2章)。この真意は以下の如くである。

技術決定論とは，正確には生産力決定論と理論されねばならぬものであり，その謂は，「社会的有機体の物質的基礎」としての生産諸力が，歴史発展の長期的かつ第1次的規定因たることである。生産諸力が第1次的たることの理由を，マルクスは次のように構想したに違いない。すなわち，生産諸力の発展は，生産的活動(人間と自然との交流)という人間の本性に包含された自然的な事態であるが故に，発展する生産諸力を人間は放棄しえず，それに適合するように生産諸関係を変革するのである。そして社会形態の歴史的移行は，次のようなプロセスをとる。生産諸力の発展のためには，労働関係がしばしば調節される。所与の所有関係は，この生産諸力の発展を促進し，ついで既に変化した労働関係に適合すべく形態的進化を迫られる。経済的社会構成の歴史的交替は，このようにして必然化するのである。

それではマルクスは，彼の歴史叙述において移行理論をいかに具体化しているのであろうか。ショーは，以下のような解釈を提示する(第3章，第4章)。

資本主義から社会主義への移行に関しては，『資本論』第1巻の蓄積論だけでは，『経済学批判』の「序言」の定式は実証されえない。利潤率の傾向的低落法則論，恐慌論が展開される『資本論』全巻をふまえてはじめて資本主義の過渡性が証明され，社会主義への移行が問題の土俵にのぼる。「序言」の歴史的弁証法は，ここに十全な内容をもつ。以上において銘記すべきは，弁証法的方法が社会主義への移行を保証するのではないこと，およびプロレタリアート革命の勝利をルカーチ的に，物質的条件ぬきの自己意識の獲得の結果として理解してはならぬことである。

資本主義に先立つ社会諸形態の移行論については，詳細は略し，第5章「結論」とあわせてショーの見解を整理しよう。

ショーは，「序言」での生産様式の継起的発展段階論を通説通り理解し，しかもそれをマルクスの後期の諸著作にほぼ一貫するものとする。その上でショーは，マルクスの歴史理論の問題点を以下のように指摘する。

まず，資本主義から社会主義への移行がもつ弁証法的性格が，先資本制時代の移行には欠落している。マルクスは，先資本制的社会諸形態が，資本主義のように，生産諸力を活性化させ，同時にその桎梏となるという見解を示していない。「序言」の定式は，マルクスの実際の歴史叙述と一致しないのである。さらに，マルクスは，アジア的，古典古代的，封建的各生産様式を発展段階論的に理解したが，各々の下での生産諸力は質的にそれほど異なってはおらず，各生産様式はこの点で著しい親近性をもつように思える。また，これらの生産様式の各々が明確で自律的な発展的傾向をもつか否かについて，マルクスの明言はない。以上からすれば，「序言」の発展段階論の定式は，社会構成の発展の現実の歴史的過程に照応しないと思われるのである。

II

以上に述べたように，本書の特徴は次の2点にある。第1に，マルクスの生産諸関係概念が所有関係だけでなく，「生産の技術的質料的自然的側面を示す」(p. 31) 労働関係をも含む，としたことである。ショーは，この労働関係概念の識別を単に概念の精密化の問題にとどまらせず，生産様式の移行の理論的把握との係わりで労働関係を位置づける。すなわち，ショーは，生産諸力の発展→労働関係の変化→所有関係の交替というシェーマを提示し，「序言」での生産諸力と生産諸関係の矛盾，適合の論理をより緻密にした。第2の特徴は，「序言」の定式を認識基準としたマルクス歴史理論の説明的有効性が検討されたことである。そこにおいてショーは，定式の移行論が厳密には，資本主義から社会主義への移行以外には適合しないとする。すなわち，マルクスの諸著作の歴史叙述に即しては，原始共産制→アジア→古典古代→封建制→資本主義という発展段階論が論証されないことを示す。かくてショーは，単線的発展段階論の不十分性をマルクスの著作に内在して明らかにした。

とはいえ，このことは本書の限界を構成することにもなっている。すなわち，後期マルクスが歴史認識における類型性を語っている——山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』第7章，第8章参照——にもかかわらず，ショーは「序言」の枠組を不動の基準とするのである。マルクスに内在する姿勢を貫くならば，マルクスの歴史理論形成史への配慮も必要ではなかったか。またマルクス歴史理論は，歴史的に独自なものとして資本制社会を認識するに必要な限りで，過去の歴史過程が回顧されるという特質をもつ——望月清司『マルクス歴史理論の研究』序，第5章参照——。この点をショーも言及しはするが(p. 114)，マルクスの歴史叙述と歴史理論とを混同する傾きがある。

本書の問題点は次に，「技術決定論」という規定をめぐってである。ショーは，技術＝労働手段決定論という通俗的な理解をしりぞけ，アルチュセール派への批判の意もこめて生産諸力決定論としてこれを理解するが，それにもかかわらず適切な規定とは言えない。ショーは確かに生産諸力を「人間的諸力，真の人間的自由の種子をまく」(p. 151) ものとするが，技術決定論という規定にひきづられてか，概して生産諸力を物的体系として叙述しがちである。生産諸力の意識的社会的契機を捉えることは，とりわけ社会形態の変革過程において，人間の主体的活動をいかに位置づけるかに係わる重要な問題であるはずである。

最後に，マルクス歴史理論を現代に再生するためには，本書の示唆する如く類型説と段階説をいかに統一するかが，洋の東西を問わず大きな課題として残されているように思われる。

なお，ショーは本書のエッセンスを抽出した次の論文を執筆している。"'The Handmill Gives You the Feudal Lord': Marx's Technological Determinism," *History and Theory*, Vol. 18, No. 6 (1979), pp. 155–176.

〔山梨 彰〕